



## 蜜柑（21）

暮色を帯びた町はずれの踏切り  
と、小鳥のように声を挙げた三人  
の子供たちと、そうしてその上に  
乱落するあざやか鮮な蜜柑の色と——すべ  
ては汽車の窓の外に、またた瞬く暇もな  
く通り過ぎた。が、私の心の上には、  
切ない程はっきりと、この光  
景が焼きつけられた。そうしてそ  
こから、或得体の知れない朗な心ほがらか  
もちが湧き上って来るのを意識し



## 蜜柑 (22)

た。私は昂然こうぜんと頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変鞞あいかわらず ひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又



## 蜜柑 (23)

---

不可解な、下等な、退屈な人生を  
僅わずかに忘れる事が出来たので  
ある。

おわり

